



Title	野田仁（編）『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2023年，ii+243頁
Author(s)	小松，久男
Citation	日本中央アジア学会報，19，64-70
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.64
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94167
Type	journal article
File Information	JB19_014komatsu.pdf



野田仁(編)『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』

東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2023年、ii+243頁

小松 久男

本書は、2019～21年度に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行われた同名の共同研究の成果を収めた論文集である。この共同研究は、おもに19世紀後半から20世紀初頭に中央ユーラシアの各地で書かれた歴史文献を対象として、そこに見える歴史認識を比較検討したという。議論の中心は中央ユーラシアにおかれているが、これと歴史的、文化的な関係が深いイランとトルコに関する論考も含まれている。以下、順を追ってみていくことにしよう。

第1章の長峰博之「ジョチ・ウルス後裔政権史料は何を参照し、ジョチ・ウルス再編をいかに認識したのか？」は、この大きな問いに答える力作である。著者は、ジョチ・ウルス後裔政権すなわち(1)シャイバーン朝およびジャーン朝、(2)ヒヴァ・ハン国、(3)クリミア・ハン国のおもな史料を精査することにより、これらがラシードの『集史』系とヤズディーの『勝利の書』系の叙述を融合したテュルク・モンゴル伝承を継承し、チングス統原理を貫くことによって自らの王統の正統性を主張したことを明らかにしている。こうした営為によってジョチ・ウルスへの帰属意識が広大な地理空間で長期にわたって保持されたことは重要である。加えて、四ウルス叙述法の継承やテュルク語史書への志向の高まり、ティムールに対する評価やティムール朝史料の影響に偏差が見られることは興味深い。一つ問いを発するとすれば、本章では分析対象とはなっていないが、テュルク・モンゴル史の重要な画期となったはずのイスラーム化について、これらの史書はどのように記していたのだろうか。聖者伝では語られることだが、いわば「正史」ではどうなのか、気になったところである。なお、本章の文脈としては、とりわけ扱った史料が各政権の同時代史料であったとすれば、「史料」よりは「史書」の方がよくはないだろうか。いずれにしても、本章は前近代の歴史叙述の特徴を示すことにより、第2章以下の議論の前提を示す役割を果たしている。

第2章のDavid Brophy, “Between Hagiography and World History: Muḥammad Amin Kashghari’s *Aṣar al-Futuḥ*” は、ムハンマド・アミン・カーシュガリーが1800年頃に著わしたペルシア語の史書『神の賜の徴』の特徴と史料的な価値を論じている。著者のカーシュガ

リーは、清朝による東トルキスタン征服の際、殺害されたカシュガル・ホージャ家アーファークイーヤ(白山党)の当主ブルハースッディーンの息子サームサークを守って西トルキスタンに逃れた一党に属し、執筆時にはサマルカンドにいたと推定されている。この史書はこれまでもっぱら新疆史の史料とみられていたが、Brophy氏はこれが未完とはいえ、天地創造から歴代君主を経てサームサークへとつながる世界史(いわゆる普遍史)の形式で書かれた史書であることに注目する。執筆にあたってはイルハン朝期の年代記から同時代のサファヴィー朝およびウズベクの史書までが参照されていた。このようにポスト・モンゴル時代の中央アジアで広まった聖者伝型の史書とは対照的な本書の目的は、流浪する亡命集団とはいえ、白山党のホージャこそタリム盆地の正統な支配者だと示すことにあった。したがって、カーシュガリーはブルハースッディーンを傑出した帝王「サーヒブ・キラーン(結合の主)」の一人に数えるのである。とくに興味深いのは、カーシュガリーがブルハースッディーンを同時代のウズベク君主たちよりも統治者にふさわしいと讃え、すでに諸ハン国を構えていたウズベク人を烏合の衆とさげすんではばからなかったことであり、ここには彼の気概のほどを見ることができる。もう一つは、著者が早くも19世紀初頭の段階でタリム盆地一帯、すなわち現代の新疆全体にあたる地域をウイグルistanと呼んでいることである。はたしてこれは孤例なのだろうか。

第3章小沼孝博「ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探究：『ハミード史』序論の検討から」は、東トルキスタン史の基本史料として名高いムッラー・ムーサーの『ハミード史』(前著『安寧史』の増補改訂版、1908年成立)の自筆写本の序論に注目し、彼がどのように過去を参照したのかを探る。この序論は過去のさまざまな史書を参照して書いたものだが、時代はノアの時代からジャハーンギール・ホージャ(前章のサームサークの息子)の聖戦(1826-28年)まで、さらに中国の歴代皇帝やトゥンガンの説明を含み、分量としても全体の5分の1に及んでいるという。ここでは、長峰論文でも触れられたテュルク・モンゴル伝承を継承しながら、異教徒のモンゴルに対してはきわめて否定的な評価を下す一方、イスラームに改宗したモグール・ウルスの君主たちには肯定的な評価を与えるところに著者ムーサーの特徴を見いだしている。もう一つ注目されるのは、当時刊行されたばかりのクルバン・アリー・ハリディーの『東方五史』(1910年刊)を参照して、中国史料「綱鑑」の情報(歴代王朝と帝王)を盛り込んでいることである。また、ジャハーンギール・ホージャの捕縛に関してイスハーク・ベグの活躍を特筆するのは、ムーサーが高く評価する「イスラームの王」アフマドがイスハークの息子であったからではないかと推測する。こうして小沼氏は史書の執筆によって名声を求めたムーサーの主観的な意図に肉薄する。そして、最後に投げられた問い、はたしてムーサーはモグーリスタンあるいはイエッテ・シャフルという地域を「発見」したのかという問いは、第6章で議論されるトルキスタンという地域の問題とも重なって興味深い。

なお、ロシアのカシガル総領事の名前はペトロフスキーと表記すべきだろう。

第4章の塩谷哲史「19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記」は、非チングス裔のコングラト朝ヒヴァ・ハン国の宮廷における修史事業を中心に考察する。ムーニスやアーガヒーの執筆した一連の年代記は、第1章で言及されたアブルガーズィーを先例としつつ、より洗練されたチャガタイ語を用いて歴代ヒヴァ・ハンの事績を称揚するものであり、そのブハラやコーカンドのペルシア語史書に勝る記述の詳細さはバルトリドも認めるところであった。この伝統はロシアによる保護国化(1873年)の後も途絶えることなく継承されたが、20世紀初頭に生まれた改革派のムスリム知識人グループ、青年ヒヴァ人の中からは、パフラヴァーン・ニヤーズ・ユスポフのようにハン国の旧体制を批判する史書を著す者も出た。ソヴィエト政権下ではヒヴァ・ハン国の歴史情報を収集する郷土史家が現れたが、その知見はソ連史学のイデオロギーから自由ではなかったという。19世紀ヒヴァの史書もホラズム・オアシスの地理的な枠内にとどまっているように見えるが、19世紀から20世紀にかけての歴史叙述の大きな変容という点では中央アジアの他の地域と変わるところはない。こうした共時性にも注目したいところである。

第5章の近藤信彰「近代イランにおけるテュルク的過去の参照」は、歴史的に多くのテュルク系人口(現代では約2割)を有し、セルジューク朝以来長くテュルク系王朝が君臨したイランにおいて、テュルクに関わる過去はどのように認識されていたのかを、近代の3名の知識人の著作から読み解いている。まずガージャール朝の宰相にして文人のガーエム・マガームは、ファトフ・アリー・シャーの伝記(未完)の最初の節でオグズ24氏族の説明を行った。これはテュルク系の出自をもつガージャール朝への接続を意図したと考えられるが、説明のむずかしさゆえに途中で放棄されたようである。テュルク系の高官であったエウテマードツ=サルタネは、自ら世界史を書きガージャール朝の先祖にも論及しているが、古今の文献を駆使してガージャール朝の起源をアルシャク朝(パルティア)を介してオグズ・ハーンに求める牽強附会な説に与して王朝の正統化を図ることはしなかった。そしてテュルク系の歴史家キャスラヴィーは、アゼルバイジャンのテュルク化の過程を描きながら、立憲革命を契機としてペルシア語への志向が高まったことを指摘し、書き言葉としてのペルシア語の優位性を強調した。総じて彼らはテュルク的な過去を参照しながらも、イランの一体性に重きを置いたのである。こうしたイランの歩みはロシア革命後に民族・共和国境界画定によって民族別の国が創られた中央アジアとは大きく異なるという指摘は比較論として有効だろう。

第6章の木村暁「トルキスタンを歴史化する：ロシア統治と『トルキスタン史』」は、ロシア統治下でムッラー・アーリムが著した『トルキスタン史』(1915年)に注目し、彼がトルキスタンという地域をいかにとらえ、歴史化したかを詳細に考察する。本論はまずトルキスタンがロシアの軍事的な征服によって成立した新しい統治空間(ブハラ・ヒヴァの両保護国を

含む)の謂いであることを確認したうえで(トルキスタンという地域概念の検討はたしかに重要な課題である)、著者とその著作の考察へ進む。彼はトルキスタン総督府の現地語(サルト語)官報『トルキスタン地方新聞』の編集長 N. P. オストロウモフに協力を惜しまなかったムスリム・ジャーナリストであり、ジャディード知識人からはロシア統治に順応する人物とみなされていた⁽¹⁾。本書は 1908 年来この新聞に連載された記事をもとに、ロシアによるタシュケント征服 50 周年を機に単行本化したという経緯をもち、ロシア統治がもたらした発展を高く評価する。著者の本領は『シャルフ朝史』などの先行史書や自身の見聞に基づく旧コーカンド・ハン国領の歴史叙述にあるが、ロシアの統治空間に合わせてブハラとヒヴァ両ハン国の歴史を組み入れることによってトルキスタン史にふさわしい体裁を整えた。これは民族的な自覚に基づいてトルキスタン史の必要を訴えた同時代のジャディード知識人のアプローチとは異なるが、ムッラー・アーリムはこの記念出版によって最初のトルキスタン史の著者になりえたと指摘する。この議論には説得力がある。過去の参照に関連して一つ問えば、少し前にムハンマド・サーリフ・ホージャが伝統的なペルシア語普遍史の形式でタシュケントとコーカンド・ハン国の歴史『タシュケント新史』を書いている(1888 年攬筆)⁽²⁾。ムッラー・アーリムはこの写本を読んでいただろうか。

第 7 章の秋山徹「遊牧英雄の黄昏、民族英雄の黎明：民族創成過程における対露協力者の位置づけをめぐる」は、19 世紀末から生まれた「我々クルグズ」というナショナルな意識の形成に媒介の役割を果たした、かつての遊牧英雄シャブダンの歴史像とソ連体制下でのその変容を考察している。前者において検討されるのはクルグズ民族史の嚆矢として名高いオスマンアリー・スドゥコフの『シャードマンに捧げしクルグズの歴史』(1914 年)である。イスラームの普遍史にクルグズ諸部族の系譜や動向を接続させた本書は、遊牧英雄としてクルグズの間に広く知られたシャブダンを中心に据えることにより、読者に部族の別を超えた「我々クルグズ」という意識を喚起させることができたとする。聖地巡礼などのイスラーム実践によってシャブダン自身もナショナルな自覚に目覚めていたという推理も興味深い。ソ連体制下では旧支配者層を撲滅する対マナプ闘争が展開されたが、「民族のリーダー」としてのシャブダン像が生き残ったことは、カスム・トゥヌスタノフの戯曲「シャブダン」(1931 年)に対する共産党の批判、すなわちこの作品は「クルグズ民族の父」なるシャブダン像を「より一層普

(1) たとえば『シューラー』誌に掲載されたトルキスタンの現状に関する一論説[Bektemirof 1908: 176]は、「オストロウモフを賛美して、あるいは彼の意をくんで自らの利益のために宣教師の新聞に論説を寄稿」する者を批判しているが、これはムッラー・アーリムで間違いまいだろう。なお、この著者はタシュケント在住のタタール人で、新聞『アジア』の編集長だったが、当局の圧力により 6 号で廃刊となった。また、木村氏はムッラー・アーリムとトルキスタン考古学愛好者協会との関係に言及しているが(133-134 頁)、同協会の 1898 年の名簿ではパルトリドヤルイコシン、シェラリ・ラーピンらと並んで正会員として記載されている。そして名誉会長はときのトルキスタン総督ドゥホスコイ大将、副会長がオストロウモフであった。

(2) 詳しくは、[Султонов 2009]を参照。

及させることになる」という批判からも確認される。一方、シャブダンをロシアの軍事侵略の手先となった「征服者」とみなすクルグズも少なくなく、こうした相反するシャブダン像は現代においても論争を生んでいると指摘する。シャブダンに焦点を当てて、コーカンド・ハン国期から現代までを見通した本章の意義は大きい。

第8章の野田仁「近代カザフ人の歴史叙述：アルタイの知識人アクトの視線」は、ロシア人によるカザフ史の叙述と対比をなす、カザフ人による20世紀初頭の多彩な歴史叙述をジュズや地域性の問題とからめつつ、とくに新疆のカザフ人アクトに焦点をあてて検討している。評者なりに読み直すと、野田氏は「まえがき」で16世紀のカザフの君主たちの事績を記した年代記は近代のカザフ語文献では参照されていなかったことを指摘しているが、それはやはり時代状況と著者の立場、そして何より歴史叙述の目的が根本的に異なっていたからだろう。有名なドゥラトフの『めざめよ！カザフ』（1910年）が示すとおり、民族的な意識に目覚めつつあったカザフ知識人は、ロシア統治という現実を前に、チンギス家の血統を引く英主アブライ・ハンやケネサルをシンボルとして「カザフの地」を舞台とする新たな歴史像を構築しようとしていたようにも見える。しかし、著者によって思い描く歴史空間はかなり異なる。『テュルク、クルグズ・カザク、ハンたちの系譜』（1911年）の著者シャカリムは、これを超域的なテュルク世界まで拡大したのに対して、新疆北部のアクトは自らの属するケレイ集団とローカルなアルタイ地方に主要な関心を向けた。ここでアイデンティティの重層性を想起すると、アクトはカザフを取り巻く状況には通じていたとしても、その韻文作品ではカザフ全体に対するよりは、もっとも愛着をもつ「故郷」・「我が地」への帰属意識を表明していたとも考えられる。中ジュズのアルグン部族の系譜や伝承の収集と伝記の作成に励んだコペイオウルもそれに近いかもしれない。また歴史叙述の方向性を考えるならば、カザフとクルグズとの比較検討も有効と思われる。一方、タタール人はなぜカザフをはじめ中央アジアの歴史にかくも強い関心を抱いたのか、という問いを立てることも可能だろう。なお、はじめにと本章で指摘されているロシア植民地の知の枠組みは、カザフ以外にも共通する問題であり、今後のさらなる検討が期待される。

第9章の小野亮介「トルコ共和国国章制定の議論から見るゼキ・ヴェリディ・トガンの過去の参照と歴史観」は、テュルク民族史観を携えて中央アジアからトルコに亡命したトガンと新生のトルコ共和国における国民統合にふさわしい歴史像を求めたアナトリアのトルコ知識人との相克を国章制定問題や始祖伝説をめぐる論争をたどりながら鮮明にあぶりだしている。これまで深く検討されることのなかった論争を詳細に分析した意義は大きい。とりわけ、ともに鉄と製鉄を新生トルコのシンボルとすべきと主張しながら、始祖伝説に宿るテュルク性から出発するトガンと、鉄を共和国の「力と進歩」、すなわち未来志向のシンボルとして支持するイスタンブールの論客オランとはまさに同床異夢であったという指摘は興味深い。こ

の事例でも millet を「民族」と解するか、「国民」と解するかによって論旨は大きく変わることになる。中央ユーラシアとの関係をどのように評価するかについて、その後も論争は続いたが、この問題は現代トルコの対中央アジア外交とも関わっている。それにしても章末に掲載された、狼と製鉄のモチーフを描いた 1926 年発行の切手は時代と心性を物語って秀逸である。

第10章の磯貝真澄「ソ連初期のムスリム知識人による自己語り：1928年のハサンアター・ガベシーの自伝的回想を読む」は、ガベシーの自己語りを事例としてソヴィエト当局者が読むことを前提に作成された回想はいかに読むべきかという史料論的考察を行うとともに、ガベシー自身の経歴を提示して興味深い。彼は革命前にムスリム宗務協議会のカーディーやイマームを務めたウラマー、また新方式教育を推進する知識人にして『詳説テュルク族史』（1909年）などを著した歴史家でもあり、革命後も教育や飢餓救済⁽³⁾などの社会活動を展開した。その彼が迫りくるポリシェヴィキの抑圧を前に認めたのが、この自伝的回想である。磯貝氏は、自己語りのテキストとは、「過去の事実の記憶をさらに取捨選択して、価値づけ、たがいに、あるいは虚構とすら結びつけていく」ものだとするロシア文学者の中村唯史氏の指摘をふまえた上で、ガベシーの革命前の経歴および革命後のヴォルガ・ウラル地方とウラマーの状況と、自伝的回想の内容とを比較検討することにより、この回想が切迫した危機感の中で書かれたこと、イスラーム的な要素は控え、自身が教育・啓蒙活動の担い手、改革や進歩の支持者であったことを強調する形で自身の像を再構築していることを説得的に論じている。本章は、ソ連初期の自己語り文書を扱う研究者には重要な示唆を与えるものである。本章を読んで頭に浮かんだのは、トルキスタンの指導的なジャディード知識人ムナツヴァル・カリの「回想録」である[Мунаввар Қори 2001]。1929年、政治警察に逮捕された後、尋問にあたる検察官を想定して書かれた文章は構築性を免れないとはいえ（同志への配慮もあったことだろう）、情報量は極めて豊かである。フィトラトの場合もそうだが、尋常ならざる状況下で書かれた回想とそれに先立つ同時代史料との往還は、研究を深めるうえで必須の作業だろう。

この論文集を通読すると、まさに近代中央ユーラシアにおける歴史叙述のパノラマを見る思いがする。最近の研究の進展ぶりを示す好例といえるだろう。編者が提案する、今回の研究課題を継承する共同研究は是非実現してほしいものである。また、この論文集を素材とした研究会を開くことによって次世代にアピールすることも大切ではないだろうか。

(3) 一時ロシアに戻っていたアブデュルレシト・イブラヒムも飢餓救済の活動に加わっていた。詳しくは、[小松 2023: 385–389]を参照。

参考文献

- Bektemirof, Ahmad. 1908. “Turkistān vilāyati,” *Shūrā* 6 (1908.3.15), pp. 175–176.
- Мунаввар Қори Абдурашидхонов*. 2001. Хотираларимдан (Жадидчилик тарихидан лавҳалар). Тошкент: Шарқ.
- Султонов, Ў. А.* 2009. Муҳаммад Солиххўжа ва унинг “Тарихи жадидаий Тошканд” асари, Тошкент: O‘zbekiston.
- 小松久男 2023 「韃靼の志士——イスラーム世界と日本——」『アジア人物史 第10巻 民族解放の夢』集英社、353–417頁。

(公益財団法人東洋文庫研究員)